

台灣人日語學習者在使用表場所的「ni」、「de」、「o」格
助詞之選擇策略
——文章完成課題的資料為分析對象——

橘孝司

國立臺中科技大學應用日系助理教授

摘要

本研究以文章完成課題調查台灣人日語學習者（中高級）在表場所的日語助詞「ni」、「de」、「o」之習得情形。調查結果如下列三點：（1）即使是中高級程度的學習者在未特別注意格助詞的選用時，其出現誤用的情形很多（特別是「ni」）。（2）雖然「位置名詞+ni」的過度使用情形明顯，但卻難構成名詞字串。（3）從調查結果可以觀察到學習者獨自的使用規則；具體而言，例如(a)以「ni」表示「範圍的限定」、「事情發生的地方場所」、(b)以「de」表示「存在」——特別是在以形容詞限定數量的情境上、(c)表行為的動詞常和「ni」同時出現。

關鍵詞：表場所的日語助詞「ni」「de」「o」、字串形成策略、以名詞和動詞為主軸、表範圍限定的「de」、表「存在」的「ni」、表移動空間的「o」

**Taiwanese Learners' Strategies for Acquiring the Japanese
Locative Particles *ni*, *de*, and *o*:
Analysis of a Sentence Completion Task**

Takashi Tachibana
Assistant professor
Department of Applied Japanese
National Taichung University of Science and Technology

Abstract

This paper examines the acquisition of the Japanese locative particles *ni*, *de*, and *o*, by Taiwanese learners using a sentence completion task. In this task, participants were presented with a compound noun such as ‘Ki-no-shita’ (“*under the tree*”) and asked to complete a sentence using their own words. ‘Correct’ sentence formation required that the appropriate locative particle. Learners at both intermediate and advanced levels displayed significant errors in their use of locative particles. Notably, learners would overuse *ni*, particularly in circumstances where *de* would be correct, whereas *o* was used correctly in most instances. From this, it could not be concluded that learners were making use of *the strategy of unit formation*. Instead, learners tended to utilize their own grammatical rules, such as the expression of *region* and *location of event* by *ni* instead of *de*, of *location of existence* by *de* instead of *ni*, and the collocation of some action verbs with *ni*.

Key words: Japanese locative particles *ni*, *de* and *o*, Strategy of unit formation, Noun- and Verb-pivots, region marker, location marker, route marker

台湾人の日本語学習者による
場所の格助詞「に」「で」「を」選択ストラテジー
— 文章完成タスクを資料として —

橘孝司

国立台中科技大学応用日本語学科助理教授

要旨

本研究では、台湾人の日本語学習者（中上級）を対象に、文章完成タスクの資料に基づいて、場所の格助詞「に」「で」「を」の習得状況を調査分析した。その結果、(1) 中上級レベルでも格助詞選択に意識を集中させない状況では誤用が多い（特に「に」）、(2) 「位置名詞＋に」の過剰使用が目立つが、名詞ユニットとは言い難い、(3) 学習者独自の規則が観察される（(a)「に」による「範囲の限定」「出来事の発生場所」の用法、(b)「で」による「存在」の用法—特に形容詞による量的限定を意味する場合、(c)ある種の「行為動詞」と「に」の共起）ことが明らかとなった。

キーワード：場所の格助詞「に」「で」「を」，
ユニット形成ストラテジー，
名詞・動詞ピボット，範囲の限定の「で」，存在の「に」，経路の「を」

1. はじめに

日本語を学ぶ者にとって、場所に関する格助詞「に」「で」「を」は十分な習得が困難な項目のひとつに挙げられる。殊に単一の形態（「在」）に対応したり、動詞の中に組み込まれたりする（「去」）中国語を母語とする学習者からは、記憶する手がかりがはっきりしないという悩みをよく耳にする。学習歴が長くなると、構文的にも内容的にもより複雑な文の産出ができるようになるが、並行して格助詞の選択のプロセスも複雑化していく。

本研究は、学習歴四年の中級から上級の台湾人学習者が、この厄介な場所の格助詞の選択をどのように処理しているのか、という問題の一端を探る試みである。

2. 先行研究

場所の格助詞「に」「で」「を」の機能をめぐっては、まず、日本語と中国語の対照研究・誤用分析の見地から、多くの研究がなされてきた（村松 1987、水野 1987、王 1994、張 2001）。例えば、水野（1987）は、範囲や空間的な広がり限定する「で」の用法の難しさを指摘する。

その後、第二言語習得の立場から、縦断的および横断的研究が発表され、多くの知見が明らかになってきた。久保田（1994）は2名の初級学習者（英語母語）を対象に1年10カ月にわたり格助詞「に、で、を、へ」の習得過程を縦断的に調査した結果、習得段階の区分や、「に」の過剰使用、母語の干渉などを明らかにした。

学習者が目標言語を目指す途上で、自分なりのストラテジーを使いながら習得を進めていく点を強調したのが迫田（2001a,b）である。初級学習者が、「位置名詞」には「に」、「地名・建物名詞」には「で」を接続させるという独自の文法規則で、厄介な格助詞を処理しようと試みていることを指摘し、これを「ユニット形成のストラテジー」と呼んだ。このストラテジーを巡り、その後様々な検証研究が行われた。

増田（2004）は英語を母語とする初級者から上級者を対象に調査し、「に」使用の大半は「到達点」の用法であること、取得順序は到達点「に」→状態・場所「に」→動作場所「で」と進むこと、形式と意味の「一対一の法則」が確認できることなどと並んで、（特に存在構文で）「ユニット形成ストラテジー」が用いられることを示した。

さらに詳細な調査で、「に」と「で」のユニット形成の結合度に違いがあることも指摘された。蓮池（2004）は、中国語話者と韓国語話者を対象に穴埋めテストを行い、中国語話者に「に」過剰使用、「位置名詞＋に」のユニット形成の傾向があるが、「地名・建物名詞＋で」のユニット形成は見られないことを示した。安田他（2008）、若生（2012）、岡田・奥田（2015）も「位置名詞＋に」に比べ、「場所名詞＋で」のユニット形成度は弱いとし、韓国語話者を対象とした渡邊（2004）はユニットによる説明に慎重な態度を取っている。

上で見たように、水野（1987）は「で」の「範囲」用法の難しさを指摘していたが、学習者の習得過程におけるこの用法の重要性を主張するのは、岡田・林田・李（2014）、岡田・奥田（2015）である。初級学習者の「*食堂にうどんを食べた」のような誤用は、「着点」の「に」と「動作の場所」の「で」の混同というよりも、「存在の場所」の「に」と「範囲の限定」の「で」の混同の可能性があるとし、習得過程において、「に」が「範囲の限定」用法にも過剰使用される段階があると主張した。

理論的側面では、グエン（2012）が（特に森山 2008b に基づき）母語の習得理論・認知言語学の知見を応用しつつ、格助詞習得モデルを提示している。それによると、「名詞＋格助詞のピボットスキーマ」→「格助詞＋動詞のピボットスキーマ」→「アイテムベース構文」という段階を経て格助詞の十全な習得に至るという。最初は名詞をピボット（「軸」）としながらユニット形成ストラテジーを用いる段階、最後は構文全体の意味を解析して格助詞を決定する段階である。複数の格助詞間の選択や必須成分・随意成分の区別などはこの段階で処理される。グエンがここで強調するのは第二段階の存在

であり、学習者は第一段階を脱して、動詞に注目するようになるものの、動詞の求める格役割によって格助詞を決定するという文処理がまだ十分にはできていない状態があるとする。

これら先行研究の調査に用いられたテスト形式としては、久保田（1994）の穴埋めテスト・日記・対話タスク・ストーリーテリング、蓮池（2004）の穴埋めテスト・内省調査、増田（2004）の対面調査・穴埋め・英語インタビュー内省調査などがある。「ユニット形成ストラテジー」検証の研究では、安田他（2008）、若生（2012）、グエン（2012）、岡田・奥田（2015）、岡田・林田・李（2014）などのように、穴埋めテスト・選択テストが使われることが多い。

これに対し、作文を対象とする研究は多いとは言えないようである。山本（2012）は穴埋めテスト調査の問題点を指摘し、作文コーパスを分析した。その結果は「に」の過剰使用は見られるものの、「に」や「で」のユニット形成は認められず、その違いは調査対象としたデータの違い（自由作文の調査と穴埋めテスト）によるものではないか、と指摘している（p.39）。

3. 目的

本研究は台湾人の日本語学習者の作文データを基にして、格助詞「に」「で」「を」の習得状況を探る一連の研究の一部をなす。今回は文章完成タスクによって得られたデータを分析する。穴埋めテストが、格助詞に意識を集中させた際の学習者の言語能力を測るものとするれば、自由作文の調査は、学習者が文章全般に気を配りつつ言語を産出する中での言語能力を見るものであろう。これらに対し、文章完成タスクは、文頭に置かれた名詞の後に短文を自由に続けさせるというものであり、穴埋めテストほど形式そのものには意識が集中していないが、自由作文ほど形式の選択を制御する条件が複雑化していないという点で、比較的誤用の要因を探りやすいのではないかと期待される。

本稿の狙いは以下の三点である。

中級から上級クラス（学習歴四年）の中国語話者による文章完成
タスク、すなわち格助詞選択を特に意識しない状態で、

- (1) 場所の格助詞「に」「で」「を」は正しく使い分けられているのか。
- (2) 初級学習者に見られるという「名詞＋助詞」ユニット形成の影響はまだ見られるのか。
- (3) ユニット形成以外に、どのような学習者独自の格助詞選択規則が見られるのか。

4. 方法

筆者の勤務校である、国立台中科技大学（台湾台中市）応用日本語学科五専部¹の作文クラスの学習者 29 名に協力してもらった。母語は中国語であり、学習歴は約四年、日本語能力検定試験 N1 合格者 4 名、N2 合格者 17 名、N3 合格者 7 名、未受験 1 名である。

地名、場所名詞、位置名詞を 5 つずつ選んで以下のような質問票を作成し、自由に文を続けさせた。

次の語の後に文を続けて、自由に文章を作ってください。

1 台湾_____。

文頭に置いた名詞（以下「文頭名詞」）は、次の 15 個。

地名「台湾、広島、一中街²、東京ディズニーランド、台中公園³」
場所名詞「弟の部屋、危ない道、この川、学校の運動場、デパート」
位置名詞「机の上、桜の木の下、台中駅の前、建物の後ろ、
果物の中」

場所名詞や位置名詞の場合、ただ名詞だけでは発想が浮かびにくいと思い、「弟の」「危ない」「机の」「桜の木の」など適当な修飾語

¹ 学制・学生の年齢としては日本の五年制高等専門学校に相当。中学校卒業後の 15 歳から 20 歳の学生が五年間学ぶ。

² 本学近隣の商店街。食事時には学生でにぎわう。

³ 本学が位置する台中市の中心にある公園。

句を加えてある。また、作文の内容面に集中できるよう、「厳しい先生の授業に遅れたら」「私が彼女に惹かれるのは」などのダミー問題 5 問を加え、全 20 問とした。時間は約 30 分で、特別な制約は課さない。自由に想像力を働かせながら、面白い内容を書いてほしい、とだけ指示した。

さらに、回答が曖昧な場合を確認するため、必要に応じて日本語による事後インタビューを行った。

5. 分析

5.1. 調査結果の概観

全く制約なしのタスクだったので、問題となる「に」「で」「を」以外の助詞や別の名詞を後続させた例も見られた。とりわけ、名詞が文頭に置かれているため、これを「主題」と解釈して、「は」或いは、それに類する主題導入表現も非常に多く見られた。

(1) 「台湾は私の生まれたところです 4AC⁴」

(2) 「台湾といったらマンゴーかき氷 4CA」

また、「の」を介して他の名詞に後続させたり、複合名詞を作ったりするユニークな例もあった。

(3) 「広島の原爆平和記念館は歴史を刻んでいます 4BG」

(4) 「広島焼きを作るのを楽しんでいる 4OC」

「に」「で」「を」以外の格助詞の使用例はごく少数に限られていた。

(5) 「建物の後ろからストーカーがあなたの部屋を覗いて 4OC⁵」

(6) 「東京ディズニーランドへ行ったら、自分はストーリーの主演になりました 4BA」

さらに助詞が脱落している例も観察された。この場合、単に書き忘

⁴ 学習者には数字一つとアルファベット二つから成る識別コードが振ってある。

⁵ 「から」の使用例は (5) と「動物園から逃げましたか 4FY」の 2 例のみ。そもそも起点表現の用例が少なく、この 2 例以外には「危ない道を離さない 4CI」だけだった

れたのか、口語体での格助詞脱落に倣ったものか不明である。(7-8)などは文体的効果を狙って敢て省略したようにも見える。

(7)「危ない道もっと注意してください 4OG」

(8)「桜の木の下舞い散る花びらが恋話を囁いでる恋人の肩に落ち 4OC」

今回の分析では(1-8)のような例は考察外とし、対象は「に」「で」「を」に限定する。

ただし、次のような例は、学習者自身が文頭名詞の直後に「の＋位置名詞＋格助詞」を書き加えたものであり、格助詞選択の貴重な資料なので分析に含めることにした。((9)は位置名詞に分類。)

(9)「この川の中に妖怪があるらしい。4CG」

さらに、ダミー問題「もし厳しい先生の授業に遅れたら」などの中にも格助詞使用の例が見られたので、これも資料に含めた。そのため「大久野島に住みたい」「千葉にある」のように元の文頭名詞リストにない名詞も含まれている。

こうして、文頭名詞の後に「に」「で」「を」が後続する例を収集し、正用・誤用別に分類すると、表1のようになった。

【表1】 資料体に見られる正用例・誤用例の総数

正用例			誤用例		
に	で	を	に	で	を
96	64	16	52	26	2
176			80		

誤用例は正用例のほぼ半数観察され、学習歴四年の学習者であっても、助詞選択を特に意識しない状況では、かなりの誤用が見られることがわかる。「に」の誤用が目立つが、「で」の誤用もその約半分あり、「に」の過剰使用が一般化しているとまでは言えそうにない。

ただし、注意しておきたいのは、正用・誤用の厳密な線引きは難しいことであり、誤用例の中には、適格性のやや低いだけものや正

用例と十分交代可能なものも含まれている。が、これら判断が微妙な例は、むしろ学習者の格助詞選択の意識に絡んでおり、できる限り以下で検討する。(以下、誤用例には*を付す。)

5.2. 「名詞＋格助詞」ユニットの検討

資料体中の格助詞の使い分けには、「名詞＋格助詞」ユニットの影響があるのだろうか。迫田(2001b:29ff.)によれば、初級学習者は「位置名詞」＋「に」、「場所名詞」＋「で」の結合を用いる傾向がある。そうであれば、特に「位置名詞＋に」と「場所名詞＋で」の組み合わせの場合に、述語と対応しない誤用例が生じやすいと予想される。例えば、「*部屋の中に〇〇が歌う／食べる」「*広島で〇〇がいる／行く」のようなねじれた文である。

そこで、この点を確認するため、文頭名詞を「位置名詞」と「場所名詞」に分け、正用・誤用の用例を表にまとめてみると、表2のようになる。(以下、「地名」と「場所名詞」はまとめて「場所名詞」と呼ぶ。)

総計を見ると、位置名詞の正用：誤用の92：41に対し、場所名詞は84：39と、どちらもほぼ2：1であり、それほど差はないようにみえる(この傾向は表1と同じ)。ところが、誤用例の助詞別総計に注目すると、面白いことに気付く。誤用例の内訳は、場所名詞の場合、「に」：「で」=18：19とほぼ同数なのに対し、位置名詞では「に」：「で」=34：7と、圧倒的に「に」の誤用が多い。つまり場所名詞の後では、二つの助詞は同じ程度に誤用を起こしているが、位置名詞の後ろでは「に」が誤用の引き金になることが多い。このように、特に位置名詞の後で「に」の過剰使用が起きているということは、「位置名詞＋に」ユニットが根強く残っている可能性を示唆しているようにも見える。他方で「地名・場所名詞＋で」の結びつきはそれほど堅いとは言えないようである。

【表 2】 文頭名詞別の正用例・誤用例数（数字は用例数）

	文頭名詞	正用例数			誤用例数		
		に	で	を	に	で	を
位置 名詞	机の上	18	1	0	1	2	0
	桜の木の下	2 (1)	11 (1)	0	11	2	0
	台中駅の前	10	4	0	4	1	0
	建物の後ろ	10	2	0	5	0	0
	果物の中	7 (9)	9 (3)	0	8 (4)	1 (1)	0
	その他の 位置名詞	3	1	0	1	0	0
	助詞別の総計	60	32	0	34	7	0
	総計	92			41		
場所 名詞	台湾	0	3	0	1	1	0
	広島	2	0	0	3	1	0
	一中街	2	3	0	4	4	0
	東京ディズニー ーランド	1	4	0	1	0	0
	台中公園	6	2	0	1	4	1
	弟の部屋	3	0	0	1	1	0
	危ない道	1	1	12	1	1	0
	この川	5	2	0	1	0	1
	学校の運動場	3	7	0	0	3	0
	デパート	0	3	0	2	0	0
	その他の 場所名詞	13	7	4	3	4	0
	助詞別の総計	36	32	16	18	19	2
	総計	84			39		

【() は「桜の木／果物」以外の名詞＋「の下／の中」の例。】

5.3. 位置名詞の種類別分析

名詞ユニット形成のストラテジーを用いるとは、つまり、位置名詞の後では機械的に「に」を選択するということであろう。

では、誤用例では動詞による選択が意識されていないのだろうか。この点を確認するため、もう一度表 2 の「位置名詞」の部分を見てみよう。すると、二つの点が目を引く。「上に」の正用が多いこと (18 例)、「下に」「中に」の誤用が多いこと (11 例、8 例) である。この、「下に」「中に」誤用例の多いことが、表 1 の総数値にも大きく影響している。そこで、まずこの三つの位置名詞の用例から検討する。

5.3.1. 「上」の表現

「机の上」の正用例の動詞は、大部分が存在動詞「ある／いる」(12 例) であり、他には「置く」4 例、「座る」2 例。(論文末の【表 4】正用例・誤用例別の動詞リストも参照のこと。)

(10) 「机の上にゴキブリの死体があった 4OA⁶」

(11) 「机の上にお菓子がたくさん置いてある 4BC」

(12) 「机の上には私だけが見える犬が一匹が座っていて 4CG」

「で」の正用例は 1 例のみ。

(13) 「机の上で子猫が寝ています 4OE」

以上の正用例に対して、誤用例は「に」1 例と「で」2 例のみ。この「に」の誤用は名詞ユニットの影響なのだろうか。

(14) 「*机の上にはどこかの野良猫が果物を食べている 4CY」

学習者 4CY の他の回答例を調べてみると、「行為の場所」の例では「*桜の木の下に...コーヒーを飲みながら空を見えています」、「存在の場所」の例では「台中駅の前にはバスや車がいっぱいあるので」

⁶ < > は筆者による訂正、補足説明。

「果物の中には蟲があるので⁷」のように、正用誤用を問わず、「位置名詞」には「に」を用いている。

他方で、「あそこで運動したら」のように「行為の場所」の「で」は習得しているので、動詞による助詞選択の誤りというよりも、「位置名詞」には「に」を接続させるというストラテジーに頼っているのかもしれない。

これに対し、「で」の誤用 2 例の動詞は「置く」と「いる」である。

(15) 「*机の上で明日の授課の本を置いている 4BG」

「位置名詞」は「で」とユニットを形成し難いと考えられる以上、この「で」選択の動機付けは他の部分に求めなければならないが、学習者 4BG は次のように、他の例では「で」を正しく使用している。

「一緒にそこで食事をしませんか」「私もよくそこで魚釣りをします」「桜の木の下でピクニックする人多すぎで」「危ない道の近くで警告灯で方向を指示したほうがいいと思う」。そこで事後インタビューを行ったところ、「置く」が行為を表す動詞なので「で」を選んだという回答を得た。ところが、さらに「置く」という行為が空間に描く移動の曲線を実際に示してもらったところ、移動の最後には移動物体が着点に接触することに気付き、自ら「に」と訂正した。したがって、この学習者は、格助詞選択のピボットが述語動詞にあることや、「で／に」の選択条件が「行為の場所／存在の場所」の違いにあることも十分に理解しているが、当該動詞の移動軌跡の把握が不十分だったということになる。

(16) 「*机の上でへんなものいってすごいびっくりした 4AE」

「で」誤用のもう一例は (16) である。学習者 4AE の他の例を見ると、確かに、位置名詞＋「に」の誤用例が見られる（「*建物の後ろに...毎晩起こして<起こって>います」、「*いつもこの辺に食事をする」）が、「で」の方は位置代名詞・場所名詞ともに誤用例が

⁷「有生物＋ある」の例は、他にも「果物の中には蟲があるので 4CY」、「川の中に妖怪があるらしい 4CG」など多く見られる。

観察され（「*桜の木の下で...人が集まっています」、「*弟の部屋で漫画がいっぱいあり」）、さらに、「で」の正用例も見られる（「台中駅の前で...合う<会う>ことも悲しい別れもたくさんある」）。そうすると、この学習者は全般的に「で」の過剰使用の傾向があり、(16)はその一つと考えるべきかもしれない。

以上で見たように、「上」の正用例は「上に…ある」が大部分であり、述語動詞に選択されたのか、位置名詞の影響なのか確言できない。誤用例は数が少なく、事後インタビューでは、学習者によって、ユニット形成ストラテジー、動詞による助詞選択の誤りのどちらも可能性がありそうである。

そこで、ユニット形成、あるいは動詞による選択の可能性をさらに探るために「下」「中」の誤用例を検討する。

5.3.2. 「下」の表現

「桜の木の下に」の誤用 11 例に使用された動詞は「キスする、休憩する、告白する、伝える、通る、飲む（2 例）、ピクニックする、（手を）ふる、待つ（2 例）」など（「通る」を除き）「場所での行為」を指すものであり、本来「で」が正用である。（論文末の【表 4】正用例・誤用例別の動詞リスト参照。）

(17) 「*桜の木の下に友達と一緒にピクニックしたいです 4DG」

(18) 「*桜の木の下に休息休憩しながら…4AA」

(19) 「*桜の木の下にあの男は女の人に『愛している』と告白しました 4AG」

一方、「で」の誤用は「集まる、埋める」の 2 例だけである。

(20) 「*桜の木の下で未来へ向かい人が集まっています 4AE」

(21) 「*桜の木の下で死体を埋めた 4CC」

しかし、「で集まる／埋める」は完全な誤用とも言い難い。つまり、位置名詞「下」の場合、明確に誤用と判断できるのは「に」が選択された場合、ということになる。

他方で、「桜の木の下で」の正用 11 例の動詞は、「言う、うんこする、語り合う (2 例)、キスする、けんかする、告白する、自殺する、流れる、飲む、ピクニックする」のように、「に」の場合と類似した情景が描写されており (「恋、花見、死」が台湾人学習者の持つ桜の木のイメージらしい)、使用された動詞も共通のものが多い。

(22) 「桜の木の下でピクニックする人多すぎて...4BG」

(23) 「桜の木の下で恋人がキスをしています 4OG」

それでも、ほぼ同数の学習者が誤用「に」を選んだということは、「下に」のユニット結合度が強く、一つの固まりとして捉えられているようにも見える。

しかしながら、事後インタビューで (18) の学習者 4AA は「休憩する」は静的な状況だから「に」を選択した、と回答した。(19) の学習者 4AG は自らから説明するうちに述語「告白する」に気付き、「で」と訂正した。前者の場合は動詞ピボットの段階にあるが、特定の動詞における格助詞選択を誤っている。後者は、文の産出段階では「下」にひかれて「に」を選んでしまったが、「で+行為動詞」の知識は習得しているし、内省すれば訂正もできるということになる。

したがって、「下に」+「行為の動詞」の例が多いからと言って、ユニット形成ストラテジーの学習者が半数いる、とも言い切れないように思える。

5.3.3. 「中」の表現

「中」の表現は特に検討を要する。この位置名詞は物理的な空間内の「存在」用法に加えて、(先行研究で見たように) 習得し難い「範囲の限定」(「果物の中で梨が一番好きだ」) の用法も持つからである。

まず、正用例について見ると、「中に」はすべて「存在の場所」の用法であり、動詞は「ある」「いる」6 例と「含む」1 例が用いられている。

(24) 「果物の中に虫があります 4OI」

(25) 「果物の中には多くのビタミンが含まれています 4AI」

これに対し、「中で」の正用例 9 例はいずれも形容詞・名詞文で、「いちばん」「だけ」といった語句を含み、「範囲の限定」の意味で使われている。

(26) 「果物の中でマンゴーが一番おいしい 4BC」

(27) 「果物の中でトマトだけが野菜とも言える 4CA」

ところが、興味深いことに、「中に」の誤用 8 例中の 6 例も、同じく形容詞を持つ、「範囲の限定」用法である。

(28) 「*果物の中にバナナが一番好きな果物です 4CI」

(29) 「*果物の中に、モモは日本人にとって大好きな果物です 4EC」

文頭名詞が「果物」ではないが、(30) のような例も観察された。

(30) 「*私の人生で見たことの神社の中に一番好きのです 4EC」

これらの例からは「中に」の結びつきが強く、ユニット化しているように見える。しかし、特に「範囲の限定」用法に誤用が多いということは、位置名詞「中」の後で機械的に「に」を選択するというのではなく、この用法には「中に」を用いるという学習者なりの規則を示しているのではないだろうか。そうであれば、「中で」を正用できる学習者同様、名詞ピボットから動詞ピボットの段階に達しているのだが、正しい形式の選択の点で躓いている、ということになる。

さらに、格助詞「に」のみによる誤用例も 1 例見られる。

(31) 「*これは台湾に一番大きい潭<湖>です 4AA」

そうすると、問題は位置名詞「中」を伴う場合だけではなく、「に」自体が学習者の文法では「範囲の限定」の機能を持っている可能性がある⁸。「範囲の限定」の「で」を「に」で代用するこの誤用は、

⁸ 初級教科書の「範囲の限定」導入の文は「の中で」がほとんどであるが、「世

非常に興味深い点を含んでおり、以下の 5.4.1. で再び取り上げる。

5.3.4. その他の位置名詞

「下」「中」でみたように、「位置名詞＋に」の誤用例があっても、学習者独自の規則に基づいたための誤用と思われる場合がある。そこで他の種類の学習者の規則を探るため、残りの位置名詞の例を検討していく。同じ動詞が正しく用いられている例もあるので、参考として合わせて示す。ポイントになるのは、誤用が位置名詞とだけなのか、それとも、場所名詞とも起きているのか、という点である。

その他の位置名詞の誤用自体は多くない（「前に」4 例、「後ろに」5 例）。まず、「出来事の発生場所」に対して「に」を用いる例がある。

- (32) 「*建物の後ろにみんなが知らないことは、毎晩起こして＜起こって＞います 4AE」
- (33) 「*建物の後ろにはよく殺人事件が起こる 4CE」
- (34) 「*台中駅の前に交通事故がよく起きています 4CI」
- (35) 「台中駅の前で殺人事件がおきました 4OE」
- (36) 「台中駅の前で毎日楽しい合うことも悲しい別れも、たくさんある 4AE」

しかし同様の誤用例は、場所名詞でも見られる。

- (37) 「*広島に吹雪があった 4OA」
- (38) 「*広島に原爆の事件があったことがあります 4AA」
- (39) 「*広島には深刻な原発が発生したことがあります 4CG」
- (40) 「*台中公園に行われるイベントは本月 20 日に幕が開かれる 4EA」
- (41) 「東京ディズニーランドで乱射事件を起こす 4OG」

このように文頭名詞の種類にかかわらず見られる現象である以上、

界で」「日本で」など格助詞だけの例もある。（「新文化日本語初級 3」第 15 課。）

「存在」の「に」を、「出来事の発生場所」にまで拡張した結果のよう
に思われる。

次に、動詞「売る」が「に」をとる例が見られる。

(42) 「*台中駅の前にさまざまな台中のおみやげを売ります 4AC」

「売る」は場所名詞でも「に」の誤用例が多い。「で」との共起例は
(47) の一例のみ。

(43) 「*東京ディズニーランドにいろいろ高すぎる記念品を売って
います 4CI」

(44) 「*デパートにいろいろな物を販売しています 4FZ」

(45) 「*一中街にいろいろな食べ物が売ってあります 4AA」

(46) 「*一中街にハートのペンを売るという人がいるので 4AC」

(47) 「デパートで売るものはとても高いです 4AA」

「～に売る」は店内に座って、或いは露店を出して客を待つ静的な
状態をイメージしているのだろうか。(45) は「～が売ってあります」
の動詞形がねじれている（自他動詞の学習の際導入される「～が点
けて／消してあります」構文からの類推か）が、「に」の選択にはア
スペクト形式「～である」が影響しているのかもしれない。(46) は
「～に...ペンを売る...人がいる」という、連体修飾節を間に含む文
であり、助詞がどちらの動詞にかかるかが一見して不明で、解釈に
よって正用誤用の判断が異なる。こういった、より複雑な文構造・
動詞形と格助詞選択の関係については、今後の課題としておきたい。

動詞「キスする」「見つける」にも「に」の例がある。「キスする」
は「位置名詞」の後でも、学習者によって揺れが見られる。

(48) 「*建物の後ろにカップルがキスしています 4DG」

(49) 「桜の木の下で恋人がキスをしています 4OG」 = (23)

(50) 「*建物の後ろに死体を見つけた 4BE」

(51) 「台湾ではよく道で赤くて血のようなものが<を>よく見つ
けます 4CG」

ただし(50)は許容レベルであろう。その場所での対象の「存在位置」に意識が集中したのだろうか。学習者 4BE は「建物の後ろ」に死体があるから「に」を選んだ、と回答した。この学習者の文作成のプロセスを想像してみるに、文頭の「建物の後ろ」により事態の場所を設定し、対象を「を」で導入した時点で(対象がその場所に「存在」するため)「存在の場所」の「に」を選んだが、その後「見つける」という「行為」を述べる際にはもはや格助詞選択を再考しなかった、というようなものかもしれない。

「で」の誤用 1 例は、台湾人学習者の作文によく見られる特徴に関係しており、注目に値する。

(52) 「*台中駅の前で宮原眼科という店のアイスクリームがおいしい 4BC」

(52) の述語は形容詞「おいしい」であるが、「範囲の限定」として用いられているのだろうか。一般的に、学習者の作文を添削していて、文全体が緩やかにねじれていると感ずることが多いのだが、同じ印象をここでも受ける。「台中駅前の店の中で…が一番おいしい」とでもすれば、ねじれ感は解消するだろう。このねじれは、作文において、文頭で文の表す事態の「場所」を提示した後は(動詞ピボットの観念が或る程度は感得されているものの)、一方方向に文を産出していき、文末に至っても文全体を振り返って各構成要素の形態を調整するというアイテムベースの考え方が不十分であることから来ているように思われる。

5.4. ユニット形成以外の使い分け

5.4.1. 「範囲の限定」と「存在」

文頭に位置名詞がある場合、ユニット形成ストラテジーというよりも、学習者独自の選択規則が働いている可能性があることを見た。

一方で、場所名詞の後では「に」「で」誤用例がほぼ同じ割合で、文頭名詞の影響は考えにくい。ならば、場所名詞の後では、「存在・

着点」の「に」、「行為の場所」の「で」といった目標言語の正しい規則以外に、どのような学習者独自の規則が働いているのだろうか。上の(32)以下で既にいくつかを検討したが、それ以外の例を見て行きたい。

まず、「果物の中に」(例(28)以下)を検討した際、「範囲の限定」用法で「に」を使う例を見たが、(53)も場所名詞に後接して、同じ用法で使われている。(類例は(30)。)

(53)「*一中街に一番多いのはゴキブリです 4BA」

逆に、(54-58)のような、「で」が「存在」動詞や形容詞と用いられる例も多く見られるが、どう考えるべきだろうか。

(54)「*一中街でおいしい食べ物が多くあります 4AG」

(55)「*一中街でおいしい食べ物がぜんぜんありません 4OG」

(56)「*台湾でいろいろなおいしい食べ物がありません 4DG」

(57)「*台中公園でハトがいっぱいます 4AI」

(58)「*台中公園で変態な人がいっぱいいます 4AG」

これらの「で」は「範囲の限定」として使われているのだろうか。存在動詞「ある」「いる」を含む以上、「に」が正用のはずである。この問題を考察するにあたって、「範囲の限定」の「で」および「存在」の「に」について整理してみたい。

松岡他(2000:21)では「で」の意味として五番目に「範囲」が挙げられているが、「期間」の名詞とともに用いられる場合(「1日で仕事を終える」)を指しているようである。

森田(1989:756ff.)は特に「範囲の限定」の「で」を詳述はしていないが、「で」全体の意味を「それ以外・それ以上ではない、対象範囲の限度」とする。

最もよく挙げられる例は「彼がそのクラスの中で一番背が高い(寺村 1992:228)」「日本で初めての缶ビール(北川他 1988:13)」のように「いちばん」や「初めて」といった比較に関する語句を含む場合であろう。

しかし、必ずしも比較の語句がある必要はなく、益岡・田窪(1987: 53)は(59)の例を挙げ、「状況が成立する場所」を指すとし、(60)の「物の位置を表し、常に存在の表現が続く」場合の「に」と対比させている。

(59)「日本では握手はあまり一般的ではありません」

(60)「日本には握手の習慣はありません」

また、益岡・田窪(1992: 78)は名詞文の例(61)を挙げる。

(61)「日本では中学まで義務教育です」

森山(2008a:166)は認知言語学の視点から格機能にアプローチする中で、「で」の機能を五つにまとめているが、19の例文のうち、形容詞文は「彼はこのクラスで一番背が高いです(範囲)」「彼のアイデアはその点で面白いと思います(理由)」だけである。(後者も「面白い」状況が成立するのは「その点」という「範囲」内である、とも解せる。)

こう見てくると、「範囲の限定」の「で」は、必ずしも「いちばん」のような比較を示す語句がある必要はないが、形容詞文(「高い、一般的な」)か名詞文(「缶ビール、義務教育」)が用いられ、「ある状況が成立する範囲」を示す。この点が(動詞文である)「で」の他の用法との違いなのであろう。

日本語教育では、典型的な例として「スポーツの中で何がいちばん好きですか」「果物の中でイチゴが一番好きです」「東京と大阪と名古屋の中でどこがいちばん人口が多いですか」「富士山は日本でいちばん高い山です」のような形容詞文によって導入される⁹。

ところが、学習者には「範囲の限定」用法はそれほど自明なものではない。仮に形容詞文と存在動詞との違いによって、(62)と(63)

⁹ 本学で使用する『新文化日本語初級』(文化外国語専門学校)は、第6課の「行為の場所」(「うちでテレビを見ます」)、第12課の「道具」(「なべで炒めます」)で動詞文の「で」を説明した後、第15課(「私は果物の中でいちごがいちばん好きです」)で問題の用法を導入する。

の格助詞選択をうまく処理できたとしても、(64) や (65) になると混同してしまうのではないだろうか。表面的には (62) と (65) はともに形容詞文になってしまうので、「高い」は「富士山」の属性だが、「多い」は「山」ではなく、「日本」の特徴である、などといった複雑な説明が必要になってくる¹⁰。

(62) 「日本では富士山が一番高い」

(63) 「日本には多くの高い山がある」

(64) 「日本には高い山が多くある」

(65) 「日本には高い山が多い」

その結果、「多い」「ぜんぜん」「いろいろ」「いっぱい」のような、量的に限定する語句を含む場合に (62) との近似性を感じて、「*一中街でおいしい食べ物が多い」のような例を作り出してしまうのかもしれない。(「先行研究」で触れたように、「存在の場所」の「に」と「範囲の限定」の「で」が混同される可能性は岡田・林田・李(2014)、岡田・奥田(2015)でも指摘されている。)

他方で、「存在」構文も、誤用を誘発することのない単純な用法というわけでもない。寺村(1982:160-1)は「存在」の構文を以下の四つに分けている。

(A) 出来事の発生…述語「ある、起こる、発生する」

(B) 物理的存在…述語「ある、ない、いる、多い、少ない」

(C) 所有、所有的存在…述語「ある、いる、多い、少ない」

(D) 部分集合…述語「ある、いる、多い、少ない」

(A) 以外はいずれも場所の表示に格助詞「に」を取る。注意したいのは、述語は「ある」「いる」だけではなく、「多い」「少ない」のような形容詞も可能という点である。例は挙げられていないが、次

¹⁰ 形容詞中での「多い、少ない」の特殊な意味的ふるまいについては(寺村1991:260-264)で論じられている。

のような場合だろうか¹¹。

(66)「本棚には外国語の本が多い」(物理的存在)

(67)「伯父には子供が多い」(所有的存在)

(68)「会議場には居眠りをする議員が多い」(部分集合)

(66)(68)のような例は、まず文頭で「場所を限定」し、続けて(行為ではなく)その範囲内で成立する状況を述べるのだ、と言われれば、納得して「に」の代わりに「範囲の限定」の「で」を使ってしまいそうである。

このように、特に形容詞文で、量的な記述がされる場合、「範囲の限定」と「存在」の境界はそれほど明瞭ではなくなってしまう。そうして、「*果物の中にイチゴが一番好きだ」「*一中街で美味しい食べ物が多い」のような相互の混用例が産み出されるのではないだろうか。

5.4.2. 「に」「で」の使い分けに関する学習者独自の規則

このように、目標言語と同じ、正しい意味論的使い分けの例も多いが、学習者独自の意味的区別も見られた。ユニット形成ではなく、文の述語と関連した意味的区分をまとめると、表3のようになる。

【表3】学習者独自の規則と思われるもの

「に」に代わる「で」	「で」に代わる「に」
1 存在構文(量的限定の語句を含む場合) 「たくさん／いろいろ…ある、多い、いっぱい」	2 範囲の限定 「一番…形容詞・名詞」 3 出来事の発生場所 「ある、起きる、発生する、行なう」 4 行為の場所 「売る、キスする、見つける」

¹¹ (66,67) は筆者の例。(68) は寺村(1982:158)の例に手を加えた。

1 と 2 は概念的類似が相互の混用を招いているように思える。3, 4 は静的な行為と捉えているのだろう。学習者に動詞ピボットの意識はあるものの、「存在」と「行為」間の意味的区分が母語話者と同じようにはいかず、独自のカテゴリー化を行っている。論文末の【表 4】が示すように、「売る、キスする、見つける」以外にも「起きる、飲む、待つ、演奏する、休憩する、告白する、パフォーマンスする」などは場所の内外に移動することがなく、動きがあるにしても場所の内部でのみ生じることに着目して、「存在」と同じカテゴリー化をしているのかもしれない。この点は学習者独自の規則の根本にかかわる問題であり、さらに用例を増やして考察する必要がある。

5.5. 「経路」の表現

最後に、「を」を巡る例を簡単に検討しておきたい。場所の表現で「を」が使われる代表格は「経路」である。本調査の文頭名詞の中で、名詞自体の意味素性から「移動の経路」として把握し、正しく「を」選択した例が多いのは「危ない道」だった（12 例）。

(69) 「危ない道を歩かないでください 4DA」

「を」と共起する動詞は「歩く（5 例）、行く（3 例）、通り過ぎる、通す、わたる、離す¹²」であり、これらの学習者にとっては、「移動」という動詞の意味カテゴリーと「を」の結び付きはある程度習得できているように思われる。しかし、少数ながら、（特に「歩く」「運転する」の場合）「に」「で」を使用すまつの誤用例も見られた。

(70) 「*危ない道に歩く時、気をつけます 4AG」

(71) 「*危ない道で歩かないほうがいい 4BC」

(72) 「*横断歩道で歩いても 4CG」

(73) 「*大通りに運転する時 4EA」

逆に、場所名詞＋経路「を」を他の動詞にまで拡張してしまった

¹² 「危ない道」が「経路」ではなく「分離」表現に用いられているのはこの 1 例のみ（「危ない道を離し＜離れ＞なさい 4CI」）。

誤用として次の1例が見られた。

(74) 「*この川を沿って歩くと国境を越えてしまう 4CA」

(74) は、動詞「沿う」との関係からを誤用に分類したが、しかし、学習者 4CA は「移動／通過」カテゴリー（「沿って歩く」全体の意味）と「を」の結びつきを正しく理解している。そのことは (74) の後半部「を越える」や、「危ない道」の例 (75) からも見取れる。

(75) 「危ない道をわたると大変な目にあう 4CA」

このように、「経路」の「を」の習得は安定しているようであるが、「歩く」「運転する」の場合には、「に」「で」を用いる学習者も少数ながら存在する。この揺れは、同じ「移動」にしても、「通り過ぎる」「通す」「わたす」など、ある場所を一方方向に移動し通過する場合と、「歩く」「運転する」のように、場所内を移動するものの一方方向とは限らない場合とがあることに関わっているのだろうか。この点も、今後の研究課題としておきたい¹³。

6. 結論

本稿は、学習歴四年の中級から上級の学習者を対象に文章完成タスクを行い、その資料に基づいて、場所の格助詞「に」「で」「を」の習得状況を分析した。その結果明らかになったのは以下の三点である。

学習者の意識が、格助詞選択という言語形式面に特に注がれていない状況で、

- (1) 場所の格助詞「に」「で」は正用も多いが、誤用もその半数ほど観察される。「経路」の「を」習得はかなり安定している。

¹³ 王 (2001:62ff.) は「移動動作」を「直線型」「循環型」に二分し、「渡る」「飛んで行く」のような前者は「を」を取るが、「散歩する」「泳ぐ」のような後者では「を／で」が交替可能としている。「歩く」は（格助詞選択から見て）前者に属すると思われるが、学習者は、後者のカテゴリーのように感じているのだろうか。

- (2) 「下に」「中に」の誤用が多いが、ユニット形成ストラテジーであって、動詞ピボットの段階に達していない、とは言えない。
- (3) いくつかの学習者独自の規則が観察される。
- (a) 「に」を「範囲の制限」用法に拡張させる。
 - (b) 「に」を「出来事の発生場所」に使う。
 - (c) 逆に、「存在」の「に」に代えて（特に形容詞による量的限定を含む場合）、「で」を用いる。
 - (d) 或る「行為動詞」を、静的状況を意味するとして「に」と共起させる（「売る、キスする、見つける」）。

(d) は、学習者が動詞ピボットの段階に近づきつつも、独自の動詞カテゴリー化を行いながら格助詞を選択していることを示している。

7. 今後の課題

山本（2012）は調査方法によって（例えば、自由作文調査と穴埋めテスト）結果が変わる可能性を指摘している。ならば、同じ学習者は、文章完成タスクよりもさらに内容重視の状況、例えば自由作文では、独自の文法を拡大させているのだろうか。或いはより形式重視の状況、例えば助詞の穴埋めテストの場合では母語話者の文法により近づくのだろうか。また、同じ文章完成タスクを、学習時間のより長い学生、或いは短い学生に課した場合、どのような違いが見られるのか。後者ではより明確に「名詞＋助詞」ユニット形成ストラテジーが認められるのだろうか。今後はこのような方向でデータを拡大させ、より総合的に考察したい。

さらに、それらのデータを合わせて、動詞ピボットに基づく、すなわち文単位での、学習者独自の動詞カテゴリー化（及びその結果としての格助詞選択）を、より精密に観察したい。この独自の動詞カテゴリー化を明らかにすることで、母語話者とのずれが明瞭になり、日本語教育への有益な提言にもつながると思われる。

(本調査に協力してくださった方々、とくに四甲の皆様に心よりお礼申し上げます。)

参考文献

- 王利民「日本語格助詞の動詞性に関する考察 ―中国語介詞との比較から―」『経営研究』8 巻 2 号、豊田：愛知学泉大学、1994、321-335 頁。
- 張麟声『日本語教育のための誤用分析―中国語話者の母語干渉 20 例―』、東京：スリーエーネットワーク、2001。
- 岡田美穂、奥田俊博「場所を表す名詞に下接する格助詞「に」「で」「を」について:日本語教育の観点に基づく先行研究の整理と課題」『九州共立大学研究紀要』5 巻 2 号、北九州：九州共立大学、2015、99-105 頁。
- 岡田美穂、林田実、李相穆「「存在場所『に』と範囲限定『で』の混同 ―韓国語を母語とする「中位レベル」の日本語学習者の場合―」『日本學報』第 99 輯、ソウル：韓国日本學會、2014、121-135 頁。
- 北川千里、鎌田修、井口厚夫『外国人のための日本語 例文・問題 シリーズ 7 助詞』、東京：荒竹出版、1988。
- グエン ヴァン アイン「ベトナム語を母語とする日本語学習者の格助詞の習得過程について：場所を表す格助詞「に」・「で」・「を」の場合」『人間文化創成科学論叢』15 号、東京：お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科、2012、63-71 頁。
- 久保田美子「第 2 言語としての日本語の縦断的習得研究―格助詞「を」「に」「で」「へ」の習得過程について―」『日本語教育』82 号、東京：日本語教育学会、1994、72-85 頁。
- 小泉保他編『日本語基本動詞用法辞典』、東京：大修館書店、1989。
- 迫田久美子「学習者の文法処理」野田尚史他編『日本語学習者の文法習得』、東京：大修館書店、2001、17-22 頁。

- 寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』、東京：くろしお出版、1982。
- 寺村秀夫『寺村秀夫論文集Ⅰ-日本語文法編』東京：くろしお出版、1992。
- 蓮池いずみ「場所を示す格助詞「に」の過剰使用に関する一考察 — 中級レベルの中国語母語話者の助詞選択ストラテジー分析」『日本語教育』122号、東京：日本語教育学会、2004、52-61頁。
- 益岡隆志、田窪行則『日本語文法セルフ・マスターシリーズ3格助詞』、東京：くろしお出版、1987。
- 益岡隆志、田窪行則『基礎日本語文法 改訂版』、東京：くろしお出版、1992。
- 増田恭子「日本語学習者の場所格「に」と「で」の誤用：日本語対面調査、英語インタビュー、助詞穴埋めテストから分かったこと」南雅彦・浅野真紀子編『言語学と日本語教育Ⅲ』、東京：くろしお出版、2004、197-214頁。
- 松岡弘、庵功雄、中西久実子、山田敏弘『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』、東京：スリーエーネットワーク、2000。
- 水野義道「場所を示す中国語の介詞<在>と日本語の格助詞「に」「で」」『日本語教育』62号、東京：日本語教育学会、1987、105-117頁。
- 村松恵子「日中語対照研究—中国語の干渉による日本語格助詞の誤用分析」『日本福祉大学研究紀要』73号、美浜町(愛知県)：日本福祉大学、1987、27-47頁。
- 森田良行『基礎日本語辞典』、東京：角川書店、1989。
- 森山新『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得—日本語教育に生かすために』、東京：ひつじ書房、2008a。
- 森山新「使用基盤モデルと第二言語としての日本語教育」研究代表者 森山新『認知言語学的観点を生かした日本語教授法・教材開発研究～ 最終報告書～』、東京、2008b、23-43頁。
- 安田春子、森まどか、劉玉琴、許清平、小野由美子「格助詞「に」「で」の誤用研究 —タイ・中国の日本語学習者を対象に—」『鳴門教育大学実技教育研究』18号、鳴門：鳴門教育大学実技教育

研究指導センター、2008、19-25 頁。

山木眞理子「中国語話者における格助詞「ニ」と「デ」の混同問題：作文コーパスの分析を通して」『中国語話者のための日本語教育研究』3号、大阪：日中言語文化出版社、2012、33-46 頁。

若生正和「韓国人日本語学習者による場所の格助詞「に」と「で」の選択に関する研究」『大阪教育大学紀要Ⅰ（人文科学）』60巻2号、柏原：大阪教育大学、2012、91-99 頁。

渡邊亜子「韓国語を母語とする日本語学習者の正の転移に関する一考察：場所を表す格助詞「に」と「で」、格助詞「が」と係助詞「は」」『人間文化研究』2号、川崎：田園調布学園大学、2004、21-30 頁。



【表 4】正用例・誤用例の動詞リスト

(数字は用例数、数字のない場合は 1 例のみ。格助詞ごとに用例数の多い順に掲げるが、同数の場合五十音順)

正用	誤用
<p>【に】</p> <p>ある 51、いる 13、行く 5、置く 4、集まる 2、埋める 2、住む 2、座る 2、隠す、来る、従う、出沒する、出る、流す、投げる、寝る、含む</p> <p>名詞文 3*</p> <p>【で】</p> <p>売る 2、運動する 2、語り合う 2、踏む 2、歩く、魚釣りをする、うんこする、(事故が) ある、遊ぶ、生まれる、起こす、起こる、収める、言う、おきる、行う、落とす、泳ぐ、買う、輝く、キスをする、けんかする、告白する、乞食する、捜す、自殺する、指示する、地震する**、食事をする、つくる、釣る、撮る、流す、流れる、なる、狙う、寝る、飲む、始まる、走る、発展する、ピクニックをする、ふる、見つける、やる、練習する、での＋名詞、形容詞文 13</p> <p>【を】 歩く 7、行く 3、通り過ぎる、通す、わたる、過ぎ去る、越える、離す</p>	<p>【に】</p> <p>売る 4、見える 3、ある 2、起きる 2、キスする 2、飲む 2、待つ 2、歩く、運転する、演奏する、起こす、行う、買う、聞こえる、休憩する、告白する、殺す、食事をする、窃盗する、発見する、発生する、食べる、伝える、通る、振る、パフォーマンスする、販売する、ピクニックする、見つける、</p> <p>形容詞文 13</p> <p>【で】</p> <p>ある 8、歩く 3、行く 2、いる 2、集まる、集める、埋める、置く、落とす、隠れる、住む</p> <p>名詞文 3*、形容詞文 23</p> <p>【を】 行く、沿う</p>

* 名詞文の例はすべて「いっぱい」。但しこの語の品詞分類には立ち入らない。

**「地震する」は学習者の造語だが、「地震がある」「揺れる」なら「で」を取るので「正用」に入れた。